
ゆきだるま

梨奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゆきだるま

【Nコード】

N4339X

【作者名】

梨奈

【あらすじ】

青い空。小鳥のさえずり。温かな朝。2階の窓から玄関先をのぞくと、そこには必ずあなたがいる。そういえば時々近所のおばちゃんに絡まれてたよね。かっこいいから。絡まれてもいやな顔ひとつしなかったから。

低い雲。風の吹きつけ。寒い朝。2階の窓から玄関先をのぞくと、そこにはもう、あなたの姿はない。もう会えないことはわかってるよ。ここにはいないから。会いたくてもあなたはきつといやな顔をするから。

だからね。聞いてくれる？私ここで精一杯頑張るから。仕事して夢叶えてあなたに会うまで女を磨いとくから。それまであなたはそこで待っていて。見守らなくていいよ。あなたの好きなことをしててください。そこにゲームはあるのかな？

***はじまり*。 : *くあなたく (前書き)**

はじめまして梨奈と申します。人生初挑戦の小説執筆となります。汗
世界最大の駄作を公開する主の度胸、そこはスルーしてどうか温か
い目で見守ってくださいれば幸いです。とても！。

(無いように気をつけますが)誤字脱字、表現変質がありましたら、
お申し付けください。

はじまり。 : *くあなた*

うそをつくのが下手なあなた。しってる？顔が赤くなって目が泳ぐの。これ癖よ？すぐに分るんだから。

人を笑顔にすることが得意なあなた。笑わせるつもりは無いんだけど。って言いながらチャックの開いたままのかばんをもって本を巻き散らかすの。 . . . ほら。もう私を笑わせた。

運動が好きなあなたはいつも目立っててほかの女の子に歓声を上げられていた。良いよべつに。あなたがかつこいいのは確かなんだから。バスケの試合が終わったときだったかな、コートから帰ってきたあなたにタオルを渡してぎゅってして「おつかれ」って言ったのおぼえてる？女子くやしがつてたなあ。あなたは、いきなり抱きしめられて戸惑ってたよね。ごめんね。嫉妬深くて . . .

勉強はだめダメなあなた。先生に指名されて、分らないから周りに聞くの。周りのみんなも分らないような問題があたって、困ってたよね。答えの書いた紙切れをあなたに投げ渡したときの喜ぶ顔ったら . . .

誕生日の贈り物をしたときには黙って私を抱きしめて「ありがとう」って言ってくれたあなた。

私のことが大好きなあなた。後輩と私がぶつかったときの怒りっぷりといったら . . . ふふっ。帰り道に後輩はわざとじゃないよって言ったら、「わざとじゃないってどうして言えるの？」ってふてくされて1歩先に歩いたあなた。怒るほどのことじゃないと思うけど、私のためだもんね。

あなたのことが大好きな私。翌日あなたはあの後輩にオレンジジュースをおごってあげたけど、グレープが好きだとわがままを言われ本当にグレープを買ってあげたあなた。たまたま通り掛って見ていた私はその後輩をどれほど憎んだことか . . . ! それなのにあなたは「おいしいか」と後輩に聞いて満足げな表情。持っていたオレンジ

ジを自分であけて飲んでいるあなたは「彼女かわいいですね」と後輩に言われて「世界一なっ！」と笑顔で返す。・・・ほんと・・・ばかね。

私がどれほどあなたのことを好きだったのか、分からなかったとは言わせない。

あなたは、優しくて単純で時々変で。でも私を守ってくれた。私のことが好きだと言ってくれた。私に離れるなって抱きしめてくれた。それなのに2人の間に別れをつくったのは・・・あなただった。

待っていても来てはくれない
会いに行きたくてもどういったら良いのかわからない
分ったとしてもあなたは喜んでくれない

おいでって どこにも行くなつて あいしてるって・・・

あなたの声が聞きたいよ・・・
あなたの笑った顔が見たいよ・・・

あなたに

あ
い
た
い
よ
.
.
.

***第1話*。：*く恋来い！く（前書き）**

こんにちは梨奈です。

ここから先が本編となります。

これからたくさん展開を用意いたしますので

少しだけでも楽しみに読んで頂ければ嬉しいです。

あゝ生意気なこと言っちゃった（汗

それではご覧下さい！！

* 第1話*。 : * ~ 恋来い! ~

青空の下にそびえ立つ真つ白い校舎。赤い屋根の体育館で私達の入学式が行われた。

式が終わると新入生とその保護者は指定されたクラスに向かう。生徒は皆、席に座り先生が自己紹介と今後の行事などを話すのを聞いていた。

私のクラスは二階にあつて校庭を見渡すことができる。一本しかない桜がとてもキレイだった。

彼氏いない歴15年目。

私、仲田真耶なかだまやは祝女子高生になった。父親の都合で中学のころ住んでいた地域とはかなり離れてしまったものの、入学そうそう友人が沢山できた。と、言っても私から話しかけたんだけどね。

一人っ子だから独りでいるのは慣れてるけど、友達つてやっぱり必要だよ。思い出たくさんつくりたいしさ。

入学式の日には数人のクラスメイトと遊んだ。まだぎこちないけど、それなりに楽しむことが出来た。私以外の子はみんな中学生時代からお互いを知ってるから、時々置いて行かれた感があったけど。地域案内してもらえて嬉しかった。

中学のころと比べて今は楽になった。受験!受験って言われること

がなくなつたから。
クラスの雰囲気は明るくてみんな良い人。
友人って呼べる人を8人って数で定められるし。
その中で何でも話せる親友も出来た。
憧れの先輩とも仲良くなれて、お気に入りの先生も見つけた。
恋人はまだだけど。

冷たい雨が降り続ける今日、私は初めて遅刻をしてしまった。何で起こさなかつたの!? って何の罪もない母に対して苛立ち、父親の運転する車に乗り、学校へと急がせた。
朝礼まであと五分。

私は急いで階段を上がり廊下に出た。その時誰かと肩がぶつかった。急いでたから顔も見ずに謝って、奥にある教室へと走った。

…何でこの時疑問に思わなかつたのかな…。この時間帯はみんな教室にいるはずなのに、廊下にしきかも教室とは逆の方向を歩く人がいたことを。
トイレかな? って思っただけだった。

教室に入った。まだ二分は余裕があつた。…間に合った。

「おはよう! 真耶。遅刻寸前だね。寝坊かい?」

そう話しかけてきたのは

友人のさつき。ボーイッシュでスポーツが得意な活発少女。

私は息を整え、うなずくと「やつぱりね」

って言つてカバンの中にある本を引き出しに直してくれた。お世話好きなのところもあつた。

「ありがとう…！」

他の友人も駆け寄ってきて、私が休みかと思っただって子もいれば、事故死したかと思っただか言いだす子もいて、朝から笑った。

先生が来て連絡事項を伝え始めた。私は窓側の席だから雨が降る外を眺めていた。

その時、ふと窓に映る隣の席の男子と目があつた。竹内雅也たけうちまひやもみんなと同じ地元の人だから私の友人と話すのをよく見かけた。私も時々話す時があるけど、本当に時々だからまだこの人のことはよく分からない。でも一つだけ知ってるのは私の親友、浅田美奈子あさだみなこと付き合っていること。

「ちょっと！あんたらさつき窓ごしで見つめ合ってたでしょっ！」
朝礼が終わってすぐ美奈子がこちらにきてそう言った。

「うんっ見つめ合ってたよ。それがどうしたの？」って私がちゃかしてみたら

「この〜！」って彼氏に八つ当たりする美奈子。

美奈子は可愛いから八つ当たりとか嫉妬とかしてもよしよしされて慰められるぐらいで終わるから良いけど。私はヒドいからなあ。独占欲。って彼氏いないんだけどね。

そんなこと思っているうちにチャイムが鳴って授業が開始された。

時が経つのは早くてもう放課後になった。

雨は相変わらず降っていて止む気配すらない。

美奈子は彼氏とは帰らない。家が真逆の位置にあるらしい。

私と美奈子は家が近いから下校はいつも一緒。

そんな美奈子の姿をみて肌黒ギャルの千夏は

「普通なら彼は彼女を送ってあげるもので、彼女も送ってって言う場面なのに」と言った。

そういえば千夏にも彼氏がるらしい。別のクラスらしいけど今年で4年目のアツアツカップル。でも現在喧嘩中みたい。

「こんなのしょっちゅうよ！しょっちゅう！。いずれ仲良くなるんだから」

翌日の朝にはもう仲良くなっていた。

それを見ていたさつきは

「彼女が黒糖パンなら彼氏は焦げパンだね」

とか言つて大爆笑。

「聞こえてるぞ〜！黒んぼカップルで悪かったわねっ！」

友人で普段おとなしい友里奈にも彼氏がいることが発覚した。

遠距離恋愛だけど3年って聞いて一途だなあって思った。

最初に彼氏いない歴15年とか言っただけど、本当はいたんだよ3人でも本命じゃなくて、ただ彼氏と彼女っていう名だけで付き合っ

た。キスとか一度もしてないし。ってかさせなかった。だって本命じゃないもん。
そう正直に言ったら相手は近寄らなくなって、いつの間にか自然消滅。

本命としたいもん。キス。

私は花の女子高生。バラ色の恋をして自分の理想にあった男性と付き合いたい。これが私の理想の恋愛生活。

今は恋人すら見つけられてない。本命にしたいなあ、この人タイプだなあって思った人はいた。いたよ隣の席にね。
でも彼女いたし、しかも私の親友だったし…。

本当に幸せそうな美奈子。彼氏も美奈子のが本当に好きなんだなあって分かる。

…いいなあ。

私も早く本命みつけて恋がしたいっ！

恋よ来い来いっ！

いつでも来いっ！

梅雨があけた頃

朝、学校の靴箱をみたら

一通の手紙が上履きの上に置かれていた。

第2話。…*~軽い気持ちで~(前書き)

第2話。 : * ~ 軽い気持ち

勘違いしてほしくないのは私の『彼氏に対する執着心』のこと。

私は彼氏が欲しいなんて思ってません! : ~ ん。少し思ってるかもだけど。

もし付き合うなら本命が良いってわけで、手をつないだりキスをしたりってことは好きな人じゃないと嫌だもん。

だからね。

入学してからまだ2ヶ月ぐらいで、お互いのこともよく分からないのに告白する人なんてもつてのほか。

: ~ 一目惚れ?

私、顔も悪ければ性格もそれ以上に最悪なんだから!

「え〜! ? 振ったのお〜! ! ?」放課後、体育館裏から帰ってきた私に美奈子が驚いた様子で言った。

教室には美奈子を含めて4人の友人が私の帰りを待っていた。

「だって知らない人だし! :」それを聞いたみんなは

「隣のクラスだよ! ?」

と声をそろえた。

「体育と数学は隣の二組と合同でやってるから、顔ぐらい見たでし

よ！」

美奈子が付け加えて言った。

「顔は見えるけど性格見えないもん。」

「もったいなくいつ！」

みんな、口々にそう言い、ため息をついた。

「何？野崎良弘のまきよしひろってそんなに良い人なの？」

「良い人だよ！」

と、真つ先に紀香のじかが答えるも、ほかの3人は顔を横に振り、

「中学のころに一度好きになったけど…ねえ…」

「ちよつと女つたらしだよ」

「格好いいからって調子にのるのは止めてほしいよね」

とお互いの顔を見合いながら語りだす。

「なんだ…。低評なら私にあの人を薦めるようなこと言わないでよ」

好評だったとしても私の気持ちは変わらないけどね。まだ引き出しの中にある本をカバンに入れ始めた私に美奈子が

「だって真耶が告白されるのはこれが最初で最後かもしれないんだよ？もったいない！」とバカにしてきた。

「あのね…っこう見えても私、告白されたのなんて5回目なんだからあー！」

私なんかを好きになってくれた人が5人もいるんだからね。

「それが全部罰ゲームでさせられてたりしてっ！」

さつきの言葉に爆笑する美奈子と友里奈。

「んなこと、あるわけ無いでしょ！失礼ねっ！」

この日の放課後は

久しぶりに綺麗な夕陽を見ることが出来た。

下校途中に、朝靴箱に入っていたあのラブレターを持って美奈子とプリクラを撮った。

そのコメントに

「初ラブレター」と美奈子が書いたのを見つけたので、消して「5通目」と書いてハートをつけた。

家に帰ると使わなくなった日記帳にその手紙を挟んだ。ほかのラブレターも挟んであった。

翌日、私がラブレターをもらったことは昨日の放課後教室に居た4人しか知らないため、冷やかす人もいなければ噂話をする人もいなかった。

3時間目に体育があって、あの人がいるクラスと合同でいつもどおり授業を行った。

野崎良弘ののきりょうこうって人は何事もなかったかのように私の前を横ぎる。

…ほら。

やっぱりそれだけにしか
私のことを思ってたんだよ。

***第3話*。…*はじまりの鐘*(前書き)**

ご覧ありがとうございます!!

今回は長めになっています…。

最後まで読んでいただけると幸いです!

第3話。 : * はじまりの鐘

この日は体育館で跳び箱をした。

いつもより綺麗に跳ぶことが出来て着地も成功した。運動は苦手だけど鉄棒と縄跳びはわりと得意。

「跳び箱も得意分野にしようかな」
って独り言を言ってみた。

体育館の舞台側にいる美奈子達の元へと走ろうとした時、隣のクラスの子の歓声が耳に響いた。

野崎良弘って人が跳び箱を跳んだのだ。

「8段か〜男子ってすごいなあ」
なんて言ったけど。内心こんなにも人気があったなんて知らなかった。

そういえば野球でホームラン打った時も歓声あげられてたっけ。
あれは…まあ。ホームランだから仕方ないとして、跳び箱8段でしょ?…ほら雅也君だって跳べてるじゃん。歓声は上がったけど野崎って人ほどではない。
モテてたんだ。あの人。

「すごいね!美奈子の彼氏」

「そうでもないよ。だって中学のころなんか9段跳べてたもん。」

「学校に9段とかあったの?」

「うん!真耶のところはなかったの?雅也と良弘と…ほら今8段を跳んだ、勇司って人が跳び箱凄く上手だったから中学の先生が特別に出してくれたの」

「あの人…」

茶髪まじりのボサボサヘアで見た目チャライその人は、梅雨の時期に廊下でぶつかつた人だった。

………勇司ゆうじっていうんだ……。

「な〜に見つめてんの?」

跳び箱を跳んできたさつきが私に問いかけた。

「もしかして!良弘のことが…!?!」

さつきは周りに聞こえないように冷やかした。

「え…! そうなの真耶!?!」

なんて美奈子ものつてきた。

「そんなわけないでしょ!今さつき美奈子が3人の名前を言ったよね?その人達つてモテてるの?」

「やっぱり気になるんだ〜」「違つてば!」

後から来たさつきは何のことが分からない様子だったが「さんにな…?」とつぶやいた後、

「あ!野崎と時停ときどめと美奈子の彼氏のことね」分かつたようなさつきに「ピンポンっ!」

と美奈子が

やっぱりモテてるんだなあ。格好いいもんね。あの人達。
つてか時停ときどめっていうんだね。あの人。

「3人っていうか、一番はやっぱり私の彼氏がモテてるよね。さつき！」

「え。私のみる限りダントツ時停でしょ。ファンクラブあるし」

「え！ファンクラブあるの！？勇司って人！！」

「2・3年の先輩にも人気あるみたいだよ。ってか美奈子の彼氏はそんなに人気ないっしょ！」

さつきは「もう一回跳んでくる」と言っつて、5・6人並んでいる7段の跳び箱へと向かった。美奈子は

「さつき、もしかして勇司のことが好きなのかもね」と、冗談っぽく言った。

7段を跳ぼうとするさつきと未だに8段を跳び続けようとする勇司君が同時にスタートした。

勇司君のほうが先に着地に成功した。その後を追うようにさつきも。

なんだか微笑ましく思えた。

雲が高い夏の空。

気温もぐんぐん上がっていくなか、今日も私達は体育をしている。

外で野球だったため

汗で体はベトベト。喉はかわくし、疲れたし。

「なに？真耶。あんた水筒を持って来なかったの？」

「うん…忘れた〜」

「あげようか？紅茶だけど」「いいよ。いいよ。そんなことしたらお宅の旦那がヤキモチやくよ〜？」

「あはは。大丈夫！今いないしょ？更衣室だから」

「え！本当にヤキモチやくんだ〜！」

「冗談だつて〜！私の旦那はそんな独占欲強くないもん」

「自分で旦那とか言ってるし！」

「だって結婚するのも時間の問題だも〜ん！」

「さようで御座いますか。それでは遠慮なく頂きま〜す」

「はいどうぞ〜」

美奈子の紅茶は冷たくて甘さ控えめで飲みやすかった。

「うんまっ！」

「でしょ〜？」

すると着替えを終えた千夏と友里奈と紀香のしかがきて

「あんたら早く着替えなよ〜！まだ下着姿つてどんだけよっ」

「千夏！スカートの方スナー開いてるよ！」

タオルで汗を拭き取りながら美奈子が言った。

「これはニューファッションよ！」

とか言いながら慌ててファスナーをしめる千夏。

さつきも着替えを終えて千夏の後ろから回ってきた。「なにさつきニヤニヤしてるの?」

やっと上着を着始めた私にさつきが耳元で何かを明かした。

「え!?!うそっ」

私は思わず吹き出した。

みんなは何が何だかわからないようだけど、千夏達の後ろで着替えている女子生徒達は分かっているらしく、さつきや私と同じように笑っている。

みんな千夏をみている。

「ねえ千夏!もしかして、それもニューファッション?」

私は笑いながら千夏に聞いた。

「はあ?何が?」

「後ろのスカート!!」

そう私が言ったとたんドツと笑いが更衣室中に響いた。

千夏のスカートが凄く(すんご)めくれているのだ。

「千夏のスカートの端がウエストに引っかかっている!!それもダイレクトに!!なんで気づかないのか、不思議すぎてウケる!!」

さつきの話を聞いて美奈子も友里奈もみんな爆笑!

「あんたらうちのパンティみたんだから一人ずつ500円払いなよ
く!?!?」

「500円とか高すぎ〜!」

そんな

くだらない話をしているうちに授業始まりのチャイムが鳴った。

「やばっ！私らまだ靴下とかはいてないのに！」

「千夏とさつきのせいだ！」

「私は悪くないよ。千夏が悪い」

「ウチ悪くないでしょ！むしろ感謝しなさいよねっ！笑顔をあげたんだからー！」

国語の時間はだいぶ遅れたけど、「今度から早く着替えるように」と言われただけで終わった。

席につくと、私の上着の第2ボタンが開いていることに気づいた。

ちょっと千夏の恥ずかしい気持ちがあった。

昼休みに班を作って美奈子達としゃべりながら弁当を食べていると「仲田って子いる？」

と、男子に呼ばれた。

勇司君だった。

一部の女子が顔を赤くしている。さつきは黙々と弁当を軽くしてい

く。

「私ですけど」

「これ、廊下に落ちてた」

そう言っただけで差し出してきたのは汚れた体操服だった。

「…！これ私の…！」

「この学年に仲田って人は君しかいないからね」

そう言っただけで微笑む彼は、格好良かった…。

「ごめんねっ！汗ついてるからすぐに手を洗って下さい！」

「ふふっなにそれ！」

そう言っただけで私の持つてる体操服に指差して、

「たたんだら、変態扱いされそうだから止めといた」と言ってきた。

「あははっなにそれ〜！」

お互いに笑って、じゃあねと自分のクラスへと戻った。

班に戻ると美奈子が頼杖ほおづえをしながら私を笑顔で見つめていた。
それと同時に千夏とさつきの姿がないのに気づいた。

「良かったねっ！」

「良かったねの意味がわかんないよ。美奈子」

「勇司と話してたじゃない！」

私はすぐに渡された体操服を補助バツクにしまった。

「その体操服、ちゃんと洗いなさいよ真耶。」

「洗っよっ！」

美奈子はニヤニヤしながら私を見ている。

そんな美奈子をほっといて

食べかけのお弁当に手をつけようとした時、

3人の女子生徒が集まってきた。

「ねえ！なかおかさん！」

「なかだ仲田です」

「もしかして勇君と付き合ってる？」

「いいえ」

「ファンクラブ入らない？」

美奈子が吹き出した。

「…入りませんよ」

「私を入れて18人の会員がいるんだけど…」

「だからなに？」

私はこうゆう、普段は親しくないのに、人のことになるといちいち噛みついて来る人が好きじゃないから、早くどいて欲しかった。

すると名前を間違えた人が話した。

「あのね田中さん」

「仲田だって」

また美奈子が吹き出した。

「もし、勇様とお付き合いしたいと思ってるならば必ず、ファンクラブに会員登録して付き合い許可証を会長の私に出してちょうだいね」
「付き合い許可証？ばっかみたい。」

「はいわかりました」

私は付き合い合う気なんてないんだから。それに相手だってほかに好きな子がいるだろうし…

「分かれればよし」

そう言つて3人はマニキュアやファッション雑誌が置かれた自分たちの班へと向かった。

私は妙にイライラした。

あの態度。まるで勇司君が自分たちの者であるかのような言いぐさ
！！

その様子を見ていた

美奈子は頬杖ほおづえを打ちながら私に言った。

「ほんと。真耶まやつて単純で惚れやすいのねえ…自分では気づいてないみたいけど」

「恋してないもん。ただ、なんで許可が必要なのかが…」

「ほら！気づいてない」

恋はしてないよ。

…ただ…

「ちよつと気になつただけ」

美奈子はちよつと笑つて

「応援するから」

つて言つてくれた。

嬉しかった。

「ありがとう。美奈子」

7月上旬。

この日はいつもより気温が高くて暑かった。

これからもっと暑くなる。

私の気持ちもきつと高くなる。

この日から私は地獄へと一歩一歩進んでいくことになる。
はじまった。運命のカウントダウン。

あなたと私の出逢いの日が少しずつ近づいてくる。・・・と同時に
あなたと私の別れの日も近づいてくる。・・・

学校中に鐘が鳴り響いた。

この運命へと向かう私に対してのはじまりの合図が
今、鳴っている。

「じつと……いつまでくっついてるんだ……掃除をしろ……」

第4話。：*く落としたものく

「ところで千夏とさつきはどこいったの？」

箒をにぎりながら私が美奈子に話しかけた時
教室に2人が帰ってきた。

「体育委員会の集まりだよね千夏」

美奈子が言った。

「そうそう。夏休み明けはすぐに体育祭でしょ？だからそのうち合
わせに呼ばれたの」

「さつきは分かるけど千夏も体育委員だったっけ」

「何よっうちが運動音痴だって言いたいの？真耶に言われたくない
な〜！」

「その言葉、そのまま千夏に返すから！」

…まあ運動音痴なのは確かだけどね。

「お取り込み中、悪いんだけど。千夏！あんた仕事しなさいっ！応
援団について真耶達に聞くのが先でしょ！」
さつきはちりとりを片手に千夏を注意した。

「応援団？真耶を入れるの？」

箒を置いて手鏡を持って前髪を整えている美奈子がさつきに聞いた。

「中学生のころ3年間連続で、応援団を経験したんでしょ？真耶。

今さつきクラスの男子に応援団員にならないかって聞いたけどいま
いち反応が薄くてさ」

美奈子が置いていた箒を使い、持っていたちりとりでゴミをはわき
取るさつき。

千夏がさつきに続いて話す。

「んで！真耶ならやってくれるかな？ってさつきと話してたんだけど。」

「やだよ。夏休みつぶれるでしょ？練習とかで！」

「そう言わずにさ！あんパンおごるから！」

「物でつらないでよ千夏！」「さつきはつれたよ」

「つられてないよ！！でたらめを真顔で言っなっ！」

掃除終了の鐘が鳴った。

放課後、応援団への入団希望者お募集の連絡をしたさつきは、みんなの名簿を黒板横の連絡板に貼り付けた。

「名簿に丸つけようか？真耶」

「そんな勝手なことしたら美奈子の名前にも丸つけるからね」

帰りの廊下で隣の教室からあの人が出てきた。

一瞬ドキッとしてしまった。

本当に惚れやすい私。

まだあの人の事なんか何も分かってないのに。

ちょっと親切にされただけなのに。

美奈子は私をみてニヤリとしてきた。

さつきは窓の外を眺めながら歩いている。

クラスの入口で友人と話しているあの人は、こちらに気づいてニコツとしてきた。

私はまたドキツとした。

…あ…そういえば
お礼言っていないや…

隣のクラスを通り過ぎ、階段へと向かう時にふと思った。

「ごめん！さつき美奈子。先に玄関で待っていてくれない？」

「え！告白！？」

「違うよ美奈子！」

「ここで待ってるから行っておいでよ」

「ありがとう。さつき」

入口で友人と立ち話をしているあの人を呼んだ。

「勇司君！」

「あ！仲田さんじゃん。どうしたの？」

「あの時のお礼言っでなかったから…」

「お礼？いいって！いいって！偶然俺が拾って届けただけだし！」

見た目チャライのに内面は思いやりがあるんだなあって思った。

まだ恋愛感情は強くないから話せたものの、勇司君の顔は見れなかった。

「ありがとう」

私はそう言い残してその場を去った。

勇司君とその友人の話が再び始まった。

「な！勇司応援団してくれよお！」

「嫌だつて！」

この日も夕日がキレイだった。

この日の下校途中、野崎良弘君が彼女と帰っているところを見た。

「最低」

翌日、紀香^{のしか}は元気がなかった。

数学の時間、クラスは半分ずつに別れて、消えた人数分、勇司君達のクラスが教室に入ってきた。

美奈子は、誰もいなくなった私の後ろの席についた。

数学の間、席は自由だった。

「…紀香^{のしか}も昨日見たんだって。良弘の彼女」美奈子が静かに言った。

紀香^{のしか}の隣の席に野崎良弘が座る。

紀香は黙ってうつむいていた。

勇司君も教室に入ってきた。

…目が合った。

私は思わず目をそらした。…まだそんなに好きじゃないのに…

すると、隣のクラスへ行った雅也君の席に、誰かが座った。…勇司君だ。

勇司君は近くにいる友人と話をしていた。

勇司君が笑った。

見た目から想像もできなかった、幼くてさわやかな笑顔だった。私はちよつとみとれた。

数学の時間は嫌いだけど、隣が勇司の時は嬉しかった。
私が教科書を忘れた時、笑顔で「一緒にみる？」
とか言っつて机を引っ付けてくれた勇司君。

ファンクラブの女子生徒は気に入らない表情だったけど、私は遠慮なく見せてもらった。
本当に嬉しかった。
数学が始まる前とかは

「今日も隣に着ますように」とかお願いしてみたりしていた。

そのためなのか、美奈子は私の隣の席に座ろうとはしなかった。

ある日の放課後、美奈子と歩いていたら廊下で勇司君とぶつかってしまった。

お互いにわざとじゃなかったけど、ものすごい勢いで謝りあった。
それがおかしかくて、2人とも笑った。
美奈子は暖かく見守ってた。

その時、足元に青色のキレイなペンが落ちていることに気がついた。

「これ…」

拾い上げてみると

「あ！それ俺のだよ。さっきぶつかって落ちたのかもな」
と言って私の持っているペンを受け取った勇司君。

「それって万年筆だよな」

「うん。そう」

「キレイだね」

「死んだ婆ちゃんの片見」

あ…何か余計なこと言わせちゃった…

「ごめんね…」

「ははっなんで真耶が謝るの？」

「だって…」

すると、階段のある方から「勇司〜！早く来いよ〜！」と勇司君を呼ぶ声が。

「んじゃ！またなっ」

そう言っただけ大きな手が私の頭の上にポンッと軽くのって離れていった…

一瞬のことだったから何が起きたか分からなかった。

でもすぐに嬉しさが心臓の辺りから全身に広がるように混みあがってきた！

少し離れていた美奈子がかげよってきて

「良かったねっ！」

と、言っただけ一緒に喜んでくれた。

私のクラスの教室から廊下をのぞく友人がいて
「ヒューー！ヒューっ！！」
と冷やかしていた。

「何々！？いつから好きになってたのよ真耶！」
「えっ好きじゃないよ！」
「嘘つくなっっ！！」

みんな教室に戻った私を囲んで口々に問いかけてきた。

私は嬉しさのあまり
ほとんど耳に入ってなかった。

「いいなあ〜真耶。好きな人と話せて」
そう声に出したのは紀香だった。

ちょっと悪い気もしたけど「でしょっ！」
って笑って返した。

紀香の傷を広げるようなことは避けたかったから。

その日、放課後いたメンバーみんなで喫茶店に行った。美奈子の行き着けの場所らしい。クラス一緒に友人8人、初めて揃ってプリクラも撮った。

その帰り道だった。

美奈子がふと立ち止まる。

美奈子の後ろをよそ見しながら歩いていた千夏が美奈子にぶつかった。

その時美奈子の持っていた財布が足元に落ちた。

「どうしたの？美奈子」

美奈子は一点を見つめたまま動こうとしなかった。

みんな美奈子の視線の先をみた。

美奈子をはじめ、私たちは目の前にあるものが信じられなかった。

そこには

アイスを美味しそうに食べる女の子と一緒にいる雅也の姿があった。
雅也は美奈子の彼氏・・・

私達は言葉を失った。

***第5話*。：*く過去と今く（前書き）**

相変わらず歩みが遅いストーリーとなっています・・・（汗

このまま学校卒業までに完結できるのでしょうか・・・心配です。

今回はとくに話がのろのろしています・・・

申し訳ありません・・・！

最後まで見守ってくださいると幸いです・・・！！！！

第5話。：*く過去と今*

夕日が放つ光は、高いビルによって私達には届かなかった。その点あの2人には眩しいほどの赤い日差しがあっていた。

美奈子は少し後ずさりをし、あの2人がいる方向とは真逆の道を走っていた。

目にはいつぱい涙をためて…

美奈子と目の先にいるあの男は、私にとって理想のカップルだった。きっと私だけじゃないと思うけど。

朝は雅也と2人で一緒にいる美奈子。

美奈子の席に彼が来たり、彼の席に美奈子がいたり。

「おはよ〜」

って言ったら

「おはよう!」って

2人は口をそろえて
挨拶を返してくれた。

漢字の小テストを、予告された国語が始まる前は2人で一生懸命に漢字を覚えていた。

「美奈子。これ、何て読む？」

「可愛い（かわいい）だよ」

「違う。可愛いって書いて、美奈子って読む。」

「なにそれ〜！」

体育の時、彼にタオルを持っていくたびに撫でられていた美奈子。美奈子は照れくさがっていたけど、彼は本当に嬉しそうにして、何かを美奈子に言っていた。

いつだったかな

梅雨が明けた日の下校時間、急に雨が降り出した。私は偶然、折りたたみ傘があっただけど、美奈子は傘を持っていなかった。

2人で入るには小さすぎる折りたたみ傘。

教室で「どうしよう」って言っていたら、美奈子の頭の上に黒い折りたたみ傘を、彼が軽くのっけた。

「俺は使わないから」

って笑顔で言う彼に

「雅也が濡れるなら、私も使わない」
って美奈子が傘を返した。

彼は優しく笑って

「じゃあ一緒に入ろう。俺のは大きいから」
って言って美奈子の持っているカバンを取り上げるように持った彼。

「家、真逆でしょ？」

美奈子は遠慮して言ったけど嬉しそうでもあった。

「美奈子が濡れるなら、俺も傘使わない」

「何それっ」

「甘えなよ美奈子！私はさつきと帰るから。ね！さつき」
私は偶然近くを通ったさつきを捕まえて言った。

さつきは一瞬「何が？」って感じだったけど、すぐに状況を察知してくれた。

「そうそう！邪魔者の真耶は私が責任をもって預かるから」
「何それ！さつきっ」

「ありがとう真耶。さつき。」

そう言って美奈子は手を振り、彼氏と共に教室を出た。
数分したら玄関から出る2人を窓から見る事が出来た。

傘は私より大きかったけど、2人で入るには少し窮屈っぽかった。

「雅也の左肩、びっしょり！美奈子気づいてないね」「さつきが言った。

彼は美奈子が塗れないように傘からほとんど体を出していた。

美奈子も彼も、友人に惚気のぶけたりは滅多にしなかったけど、お互いに愛しあっていることは一目瞭然だった。

普段は友人と一緒にいることが多い2人だけど、2人である時は本当に幸せそうだった。

「千夏なんか、休み時間も彼に会いに行ってるのに」

「何よ真耶っ！今いるでしょ？」

「今、彼のクラスは体育でいないんだよね」

紀香のじかが言う。

「そう。あいつは2組で1組と合同。4組の私達と合同じゃないから寂しいのよね」

「昼休みに会えるでしょ」

私は相変わらず寂しがり屋だね」と千夏をちゃかした。

ふと美奈子をみると
いつの間にか彼とラブラブしていた。

日が暮れるのが遅い今日この日。

今までのは何だったのか…

美奈子はその男に騙されていたのか…

あの女の人は幾度か見たことのある先輩だった。

…いつから付き合っていたのか…

みんな同じことを考えていたに違いない。

私は美奈子の落とした財布を拾い上げた。

笑顔が耐えなかった美奈子。
いつも幸せそうだった美奈子。

それは嘘偽りない、美奈子にとって宝物のような日々だったと思う。

財布の裏に

彼と写る美奈子のプリクラが一枚貼ってあった。

可愛らしい笑顔を満面に出して、彼の肩に寄っている美奈子。

私は美奈子の気持ちを考えるといてもたっても居られなかった。

「あ…っ！ちょっと真耶!?」あの2人の元へと走り出した私に、
みんなが驚き、焦った。

さつきが私を止めようと走った時には遅かった。

私は美奈子の彼氏を
思いつきり殴った。

近くにいた人
通りすがりの人
さつき達
女の先輩
美奈子の彼氏

みんな驚いたかもしれない

時が一瞬止まった

「なにすんだよ!?!」

雅也が私の肩を押した。
私は何からどう言ったらいいのか迷った。
と、言うより怒りで声が出なかった。

私は押し返した。
すると相手も押し返す。
また私が押し返した。

「何なんだよ！仲田あ！」
今度の押しは強かった。
でも私はすぐに押し返した。

涙が出た。

何か言いたい！
でも何を言ったらいいのか、何から言ったらいいのか…！

今度は押し返されるまえに、突き飛ばす勢いでいた私の腕を誰かが止めた。

…さつきだった。
さつきは黙って首を横に振った。

すると見ていた女の先輩が言った
「もしかしてまさやんの彼女？やだっ見つかったちゃった！」

「…どつゆつこと?」

あとから来た千夏が聞いた。

「…美奈子は?」

質問を遮るように雅也が言った。

「仲田が持つてるその財布、美奈子のだな。じゃあ見られたのか」

「どつゆつことかって聞いてんのよ!」

千夏もキレる。

「どつゆつことって?」

女の先輩が私達の前に出た

「見てのとおりよ」

飛びかかる勢いだった私をさつきが強く止めた。

「行こうつまさちゃん!」

2人はその場を去ろうとしていた。

「待て!」と呼び止める前に雅也が振り向いた。

「美奈子とは別れる」

その声は今まで聞いたことのない、低く冷たいものだった。

第6話。 : * ~ 泣いた人 ~ (前書き)

第6話。：*く泣いた人く

翌日、2人は本当に別れた

「昨日の夜にね、あいつからメールがきたの」
朝、渡り廊下にみんなを呼んで美奈子が言った。

「そう…」

私はどう答えたら良いのか分からないまま、美奈子に財布を渡した。
「あっやっぱり落としてたんだ！ありがとう真耶」

みんなに「別れた」と打ち明けた美奈子は、その後も明るく接して
いたけど放課後

「我慢しなくていいんだよ」ってさつきが言ったら

「何言ってるのよ！別に私は我慢なんてしてないんだから！」
って強がる言葉とは裏腹に、明るかった表情は徐々に消えはじめ、
美奈子は静かに涙をながし、崩れるように泣きだした。

その日、勇司君にあったことすら分からなかったほど、私はヒドく

美奈子のことを心配していた。

それから数日後、

美奈子と雅也のことがクラス中に噂になった。

雅也はなにくわぬ顔で過ごし、帰りはずっとあの女と一緒にいた。

美奈子は笑顔を絶やさなかったけど、目の下はいつも赤くはれてい
る。

あの時、私が雅也を殴った時、私は少しだけ期待をしていた。

実は彼女じゃなくて、知り合いだったとか。
ただ相談を受けていただけだったとか…。

押し返された時に願ってた。

「何勘違いしてんだよ！」
って言われることを…

美奈子は私なんかが思っているより深く深く、傷ついているはずなのに

雅也が他の女と楽しそうにしている姿をみても、私達に心配をかけないように笑顔で接する美奈子。

「私、応援団しようかな」美奈子が、まだ誰も丸をつけていない名簿に、しるしをつけた。

「美奈子がするなら私も」丸つけた。

「練習頑張ろうね真耶！」

「そっだねっ」

その時、あの女が教室に入ってきた

「まさやん居る〜っ?」

明るく、幸せそうな雰囲気を出していたが、確実にこちらを意識していた。

「今から迎えに行くところだったのに」

「待ちくたびれて来ちゃった」

2人が教室から姿を消したのを美奈子は見ようとしなかった。丸をつけた名簿をずっと見つめていた。

心配な私は声をかけた。

「美奈子…」

しかし美奈子は笑顔をつくり

「購買部いかない?私お腹空いちやって!」

そう言っつてまた強がった。

「そうだね。行こう!」

私は美奈子の気持ちを考えて返事をした。

本当は我慢しないで欲しかったけど…。

購買部に生徒は誰もいなかった。

カウンターの奥で腰を下ろし、今朝の新聞を読んでいるおばちゃんに

「メロンパンある〜?」

と美奈子が聞いた。

「あるよ〜!」

美奈子が財布を開け、120円を取り出した。
私もメロンパンを買った。

誰もいない教室に戻り、美奈子は私の後ろの席に座りメロンを食べ始めた。

ふと、美奈子が置いた財布を見ると、私は美奈子の今の気持ちが少し分かった。

美奈子は彼を諦めてはいなかった。

美味しそうにメロンをかじりつく美奈子の財布には、あのプリクラがまだ大事そうに残っていた。

「真耶…ありがとうね」

「え？」

「彼を叩いたんでしょ？千夏から聞いた」

「あ…うん、でもお礼なんて言わないでよ。私は思ったことをしたただけだから」

「言うより手が早いんだねっ」

そう笑って言った美奈子の笑顔は本物だと感じた。

「私、ちゃんと雅也と話してみるね。このままお互いを忘れるなんて私には出来ないもの」

その時「あ…っ」と思った。美奈子は、私がプリクラをみて考えていることがお見通しだったのだ。

「力になるから、何でも言ってね」

私は親友として当たり前前のことを言った。

美奈子は優しく微笑んだ。

夏休みまで3日の今日。

下校時間になり帰ろうとした雅也を美奈子が呼び止めた。クラスが静まり返った。

「…何？」

雅也は冷たく言った。

「話があるの、いい？」

美奈子は真剣な眼差しで彼に言った。

雅也はため息をつき、目をそらす。

「屋上で待つてる。1人できて。」

美奈子は先に教室を出た。

雅也も後を追うように静かに歩き出した。

しかし彼の方は、階段を下に降りはじめたのだ。

「まって!!!!!!!!!!!!!!」

私は怒鳴りつけ、走って雅也の胸ぐらをつかんだ。

近くにいた生徒は驚いていた。そこには勇司君もいた。

けど今の私にはそんな事

待ったく気にならなかった。

「お前：！！自分がどんだけ酷いことをしてるのか、分かってんのか！？美奈子に謝れ！！」

私の後ろは階段が下に続いている。

雅也は押し返さなかった。

「お前には関係ねえだろ？」私は掴んでいる胸ぐらを引っ張った。

「許さない」

「許さなくて結構だ」

「最低」

「そつだな」

「美奈子は闘おうとしてるのに、逃げるなんて最低！」

「だから他の奴と付き合えばいいだろ？」

「今までのは何だったの!？」

雅也は少し言葉を詰まらせた。そして静かに答えた：

「単なるあそび」

「ふざけんな!！」

「さつきから何なんだよ!！」

「あんたこそ何よ!……何が遊びよ!！」

「遊んじゃわりいのかよ!？」

「私が言いたいのはそう言う事じゃない!！」

「はあ!?!意味わかんねえよ!！」

「嘘をつくなくて言うてんのよ!……!！」

辺りがしんと静まり返った。

「は?」

雅也は一言返すと、前髪に手をあて、くすくすと笑い出した。

目に涙が浮かんだ。

でも私じゃない……

雅也だった。

「分ってるぞ。俺は最低な奴だよ」

***第7話*。：*~思いがけない日々~(前書き)**

長文となっております・・・汗

最後まで読んでいただけると幸いです！

よろしく願いいたします・・・。

第7話。…*~思いがけない日々~

昔からそう。

私は口より手を出すほうが早かった。

特に友人に害を加えた相手にはよく、怒鳴る前に平手打ちをしていた。

昔から活発な私は、大切なモノが傷つくことが一番嫌いだったから、壊されたらとにかく腹が立っていた。

…そんな自分が嫌いだ。

だから自分が傷つかれたとしても手は出さない。

…また壊された。

一階へと降りる階段と、教室のある二階へと上がる階段の狭間で、私は美奈子の彼の胸ぐらをつかんでいる。

何の騒ぎかと思ってきた約20人ほどの、クラスメイトや同級生の中に、千夏やさつきが心配そうに見つめていた。その近くには勇司君もいた。

「どつゆつこと?」

私は雅也の目を見て聞いた。

「何が? 仲田も俺に言ったじゃん。最低だって」

「そう言うことじゃないでしょ」

「どつゆつことだよ?」

「ごまかさないで答えなさいよ!」

「ごまかしてねえよ!」

涙の訳をあかさうとしない美奈子の彼は、胸ぐらをつかんでいる私の右手を振り払い、私を睨んだ。

「美奈子に呼ばれたんでしょ?」

「行かねえよ」

「何で?」

「話すことなんかない」

「聞くことは出来るでしょ? 美奈子はあるに…」

「話を聞く気もねえよ」

美奈子に対する彼の冷たい言葉に、私は怒りを抑え込んだ。

「美奈子と本気で別れるつもり？それでいいの？」

「ああ。もう終わった事だろ？」

迷った素振りを見せない彼は当たり前のように答えた。

何で…？今までのあれは何だったの？

…美奈子の一体何が悪かったの？

…涙を流した。

でも私じゃない…

雅也でもない。

きつと美奈子だ。

誰かがすすり泣く声が聞こえてきた。
千夏とさつきの声もかすかに聞こえる。

それなのに雅也は冷静にし、私の後ろ側にある1階の階段へと向かった。

「あんだ…このままだと、ろくな死に方しないよ」
私は通り過ぎ行く雅也に、聞こえるようにつぶやいた。
それでも階段を一段、また一段と降りて行く雅也は止まらなかった。

「一度、女に好きだと言った男は責任を持って最後まで愛することをする…私はこれを常識だと思ってる。…ねえ雅也。あんたがはつきりと美奈子に嫌いだって振らない限り、私も美奈子もあきらめないから！」

最後の階段を降りた雅也はこちらを振り向くことなく玄関へと姿を消した。

私のあの言葉には何の根拠もない。ただ本当に常識だと思っている。だって…そうでしょ？

本当に好きな人に振り向いてもらえたら嬉しいし、一度でも好きだって言ってくれたら、また言ってもらいたいって思うとおもつ。

そして彼を愛するし、愛されたいと願う。だから女の子は可愛くないと自然に頑張ることをする。

だから男の子はね。その女の子の努力や心を壊すようなことはいけないと思うの。

あの言葉は

私のどうしても譲れない気持ちだった。
そして、美奈子に対する償いつくなでもあった。
…雅也を止められなかったから…。…美奈子の傷を私の手で深くしてしまったから…

『美奈子と本気で別れるつもり？それでいいの？』
『ああ。もう終わったことだろ？』

私は泣いている美奈子の元へと階段を上がった。
泣きくずれている美奈子の肩にさつきが優しく手をかけていた。

美奈子に傷をつけたのは私…

「ごめんね…」
そう言ったのは私じゃない。美奈子だった。驚いた私に美奈子が続ける…

「私…何にも出来なかった…！見てるだけだった…！私が動かないといけないのに…っ！…震えてて…っ」
泣きながら詫わびる美奈子に私は首を横に振り、
「美奈子は何も悪くない！…ごめんね…っあんな事を言わせるつもりはなかったのに…美奈子を傷つけちゃった…！」
抑えていた涙が私の頬をつたって、次々と流れ落ちる。

「そんなことないよ。真耶は美奈子にチャンスくれた…：そうだよね。美奈子」

「千夏が私の頭を撫でながら言った。

「私、真耶が言ったとおり、あきらめないから…！！私、次はちゃんと話すからね…っ！」

美奈子のそんな心からの言葉に私は嬉しさと申し訳なささで涙が溢れ出した。

一部始終を見ていた観覧者達の中にはもらい泣きをしている人もいれば、馬鹿らしいと言わんばかりで帰って行く人も中には数人いた。

泣きやんだころには私達4人以外誰もいなくなっていた。

教室からカバンを取り、千夏の笑い話ですっかり明るくなった私達は学校を出た。

この日はなぜだか、一段と夕日が綺麗に見えた。
泣いたあとだからかな…

翌日、いつもなら隣の席にいるはずの雅也がいなかった。欠席したのだ。

「どこまで逃げるんだろうね」

さつきが言った。

「逃げてても無駄だもんね〜真耶!」

「そうそう!美奈子のしつこさは筋金入りなんだから!」

「ちよつと〜!一途いちずって言ってよ〜!」

こんな馬鹿らしい会話が本当に馬鹿な話だったと感じたのは放課後のときだった。

千夏がすごい勢いで教室に入ってきて、美奈子に衝撃の事実を話した。

「さつき、うちの彼から聞いたんだけど!今朝、雅也が先輩に殴られたらしいよ!んでそのまま家に帰ったって…!」

「えー!?!」

私もさつきも紀香のしかも、声を出して驚いたけど美奈子は言葉も出ないほど驚いていた。

「何年生に!?!」

私が聞いた

「3年生らしいよ。先生達はまだ知らないみたい」

「昨日のことでイライラしてて、先輩にはむかつたとか?」

いかにもありそうな紀香のしかの考えは違っていたみたいで、千夏は首を横に振った。

「理由はわからないけど…体格の大きい4人組がいきなり雅也を囲

んで何かを話していた後に殴られてたって…。」

美奈子と目があった。

千夏が話を続ける…

「うちの彼が遠くからそれを見てて、先輩が去ったときに雅也に近づいたら、このことは誰にも言うなって言ったらしいよ。通りすがりの男性が、ボロボロの雅也の姿を見て家まで送って行ったんだって」

千夏が話を終えた時、沈黙が続いた。

「これって…美奈子の件とは関係ないよね…？」

千夏が沈黙を破った。

私は今までの、数々の不自然な雅也の行動を思い出していた。

「…ねえ。美奈子」

「わかってるよ真耶。私、雅也に会いに行くね。話してみたい。私はうなずいた。」

「私も行こうか？」

「大丈夫だよ。さつき。ありがとう」

「メールしてね」

「うん！」

美奈子は私に笑顔で返してカバンを持った。

さつき達と一緒に美奈子を学校の玄関で見送った。

美奈子はしばらく、こちらに手を振っていたけど前を向き直して、

小走りして行った。

「うまく行くといいなあ…」私の心からの願いだった。

だってあんなに幸せそうだったんだもん。あの2人…

「さく！応援団の名簿を出しに行くよ千夏！」

さつきが言った。

「待って！メロンパン買ってから行こう！購買部が閉る！」

「私も買う！」

購買部へと走る千夏と紀香のしかを見ていた私は、ふと校長室に目を向けた。

そこからでてきたのは…

「…！雅也！？」

…だった。

私は慌てて駆け寄った。

雅也は右目をガーゼで軽くとめられていて口や頬に痛々しい傷があった。

「…美奈子は？」

「さつき雅也のところ」…」

「は？何で？」

「あなたが傷ついたって聞いたから…」
それを聞いた雅也は頭をかいた。

さつきと千夏と紀香のしかが走ってきた。

「何であんたがここにいんのよ！？」

千夏が聞いた。

「あなたの彼氏が校長に告げ口したんじゃない？訳を聞きたいから学校に来て呼ば出されたんだよ」

あきれた口調で雅也が答えた。

「あ…そうかも。昼休みに私があいつと会う前に校長に会ったから

…」

「で、何で殴られたの？」

さつきが私より先に質問をした。

「…帰る」

そう行つて立ち去ろうとする雅也の腕を私が掴んだ。

次はどんな冷たい言葉を浴びされるんだろう…

正直、少し怖かったし、二度と聞きたくなかった。

振り払う素振りもせず、私達を見ずに、静かに雅也が答えた。

「…美奈子をつれ戻す。…あいつの家は真逆だからな」

「…え」

今度はさっきの美奈子と同じ感じで驚いた私達は、顔を見合わせた。

「話せば長いけど…俺は美奈子に嫌いだななんて言えない」

私達は一斉に笑顔になった。これほどの喜びは高校入学以来のことだった。

「俺は美奈子が好きだ…」

「そんなことは良いから早く美奈子のところに言ってあげなよ!」

「なんだよ仲田!腕を掴んでおいてその冷たさ…」

みんなまた顔を見合わせて喜びの笑顔で笑った。

「よくわかんないけど…まぢで良かった!超嬉しい!」

千夏が本当に嬉しそうに言った。

「んじゃあ…俺行くわ」

そう行って走りだそうとした雅也より先に、私の携帯が鳴った。
…
電話だ。

「やば!電源切ってなかった!」

「早くしまえ!しまえ!」

紀香^{のしか}がせかした。

「校庭を出たら？そしたら学校内じゃないから携帯使えるよ」「さつきが教えてくれた。」

「え？そんなもんなの？校則って」
私は関心した。

雅也を含めたみんなで、そのまま靴に履きかえて校庭を出た。正門前のところで校舎から見えない位置で携帯を取り出した。

電話は美奈子からだった。

さつきは驚いたから切ってしまったため、私からかけ直そうとした。するとまた美奈子から着信がきた。

「もしもし？美奈子どうしたの？」

私が聞く前に美奈子の声が早く耳に届いた。

…その声はひどく疲れきっていて、必死な…でも微^{かす}かな小さな声だった。

「たすけて……!!」

驚き焦った私は美奈子の名前を呼んだ。

「美奈子！？どうしたの！？美奈子！」

「え！どうしたの！？」

さつき達が駆け寄り、千夏が携帯の裏側に耳をあてた。

そんな様子にただならぬ雰囲気を感じとった雅也は何かをさとつたように美奈子が向かった道を走り始めた。

美奈子が狂ったように助けを呼んでいる。

「助けて…っ！お願い…！」

この呼び声は私達にはなく美奈子の目の前にいるであろう誰かに言っているようだった。

微かに男の声が聞こえた。と同時に電話が切れた。

突然のことで途方にくれていた私にさつきが

「美奈子を探さなきゃ！」
と背中を押した。

「とりあえず紀香^のはここにいて！何かあったらすぐに連絡するから。その時までは先生に言ったらだめだよ。」

さつきはそう指示し、私と千夏と共に雅也が走り去った道へと急いだ。

「美奈子…っ！」

この時の私の心臓は今にもはちきれそうなほど鼓動が早かった。

第8話。…*くおかえり*

太陽が沈んでいこうとしている。けれどまだ外は明るかった。

「美奈子ー！どこにいるのー!?」

みんなは必死で美奈子を探した。

雅也の家までの道のりを千夏が案内した。

美奈子と必ず会えるはず…

しかし先に美奈子を探していた雅也が、前の方から戻ってきていた。

「俺は違う道に行く。何の手がかりもないんだ…とにかく手当たり次第に探し出す」

冷静な口調とは裏腹に、いてもたっても居られない様子の雅也は、すぐ近くにある左手側の道へと走っていった。

「雅也は怪我してる！私もついていくよ」

「わかった。任せたよ真耶。私は千夏と一緒に別の道に行くね」

雅也と私、千夏とさつきで二手に分かれて美奈子を探すことになった。

雅也はものすごい速さで走っていたため、見失わないように着いていくのが精一杯だった。

あの電話があつてから数十分がたっていた。私の美奈子への心配がますます深まったその時。

雅也が遠くのほうで道を左に曲がったのを見て、私も後からそこを曲がった時、空き地の手前にある道路で体格の大きい男とその近くで倒れている雅也、そしてそれを支える美奈子の姿があつた。

「美奈子！雅也！」

私は急いでかけつけた。

さつき達に連絡をすることさえ忘れて。

「お前。面白くねえな！雅也。この前の約束忘れたのか？」

「…美奈子に手を出すな！」

幸い、美奈子には怪我は無く、無事だった。

しかし雅也の方は右腕を抑え立つことは出来なかった。

「言ったはずだろ？あの女と別れたら、お前の本命の彼女は俺がもらってなあ！」

どうゆうことなのか、私も美奈子も分からなかった。あの女って…
アイスを食べていた先輩のこと？

「どうゆうこと？」

私が相手の男に聞いた。そいつは3年生だった。

「こいつが俺らにぶつかってきたんだよ。な？雅也くん。」
馬鹿にしたようにそいつは答えた。

「謝っただろ…！」

雅也が言い返す。

「謝った？いつの話だ？そりゃあ。あんな態度じゃ殺したくもなるわ！ボケえ！生きてるだけで幸せだと思いやがれ！」

「謝ったのに、何かに因縁つけて、無理やりあの先輩と雅也を付き合わせたの？」

私は怒り寸前の状態で、でも冷静に男に質問をした。

「あの馬鹿女はボケが好みなんだとよ」

鼻で笑い、男が答えた。そして話を続ける。

「それを分かかって俺はボケに告らせた。案の定OKってとこだ」

笑いながら言う男。私は足元に座っている雅也と美奈子を見つめた。

雅也が痛みながら、初めて訳を話した。

「…俺は軽い気持ちで…。振られると思っていたから…」

「それでなのね…」

美奈子は優しく雅也を抱きしめた。

「…たくよお…！何なんだ？お前の彼女は。あ？逃げ足は早いわ。隠れるわで、何も出来なかった」

頭をかきながら言った男はこれであきらめるかと思えばそうじゃなかった。

「約束は約束だ。渡せよ」

「誰がお前なんか…！」

雅也が言い返す。

「ああ！？」

キレた男が雅也に手を挙げる。

思いっきり振り下ろされたその手を私が、私の頬ほおでかばった。

この時の私にはなんの恐怖もなかった。
自然と雅也をかばっていた。

「なんだよブス！どけよオラァ！」

私は雅也と美奈子の前をどかなかつた。

男は威嚇する。

「あ？何だその目は？」

私は真つ直ぐに相手を睨みつけた。

そして私は、相手の右頬に思いつきり平手打ちをかました。

「最つっつ低！！」

私は唾を吹きつけるように先輩に言った。

男の怒りが頂点に達した。今度は私に大きくごつい手が振りかかった。

「真耶！！」

美奈子が叫んだ。

と同時に私はいつものまにか地面にふせていた。気付いたら誰かが私をかばっていた。

それは美奈子でもなく

雅也でもない。

…勇司くんでもないその人はどこかで見たような男子だった。

「大丈夫？痛かったらごめんね」

その男子が私に声をかける。

「良弘…！」

雅也が呼びかけた。

野崎良弘^の。私に告白をしてすぐに女をつくった、あの本人だった。

出来ればあんまり会いたくない人だったけど、悪い人じゃなさそうだし、今のこの状況で助けがきたのは少し安心した。

「…ありがとう」
そう言って

私はすぐに起き上がった。

「昨日の放課後だったけ？雅也に掴みかかったのって。あの時もすごかったけど、今もすごいね」
「うるさいなあ」

避けられた上に勝ったような雰囲気私達の姿をみて、男の先輩はとうとう怒り狂って良弘君の後頭部をめがけて殴った。

「いやあっ!!」

美奈子が叫んだと同時に良弘君は地面に倒れた。

「良弘!!!!」

「野崎君!?!」

私は先輩をすぐに睨みつけた。

「さつきから何だよ!その目はよあ!!!!」

怒鳴った先輩の右頬にグーが入った。∴良弘君だった。

倒れかけた先輩はすぐに状態を起こし、良弘君の左頬を殴った。そして良弘君も殴り返す。
喧嘩けんかが始まった。

私達が止めようとした時に一台の車が止まって、助手席側の窓側が開いた。

運転手の男性がそこから大声でこちらに呼びかける。

「なにやってんだ！」

その人は男の先輩の担任だった。

先生は車から降り、生徒をなだめた。

「学校に來い。山田」

「なんでスか」

「何でじゃないだろう！後輩を殴るなど、あれほど言ったのに！」

「知らねえよ。んなこと」

「とにかく車に乗れ。いいな？…それから君もだ」

良弘君だった。

「先生！良弘は…！」

焦った雅也が先生に喧嘩の原因を話そうとした。

しかし先生は

「彼から直接話を聞く。君達はすぐに帰りなさい」

と言って、男の先輩と良弘を乗せて車を走らせ、去っていった。

あたりは静まり返った。

夕日の明かりが私達を優しく包み込んだ。

「良弘なら大丈夫だ」

そう言つてゆっくりと立ち上がった雅也は右足が特に痛むらしく、
ほぼ片足で立った。美奈子に支えてもらいながら…。

「…俺は…弱い」

雅也はそう言つて口元は笑つて見せたけど、溢れた涙を止めること
はできずに、美奈子を抱きしめた。

「ほら。すぐに泣くだろ？」

でも美奈子は黙つて彼の背中に手をまわし
優しく応えた。

「おかえり雅也」

2人が元に戻った。

嬉しかった。

すごく、すごく！すっごく！！

そして雅也と美奈子は

やっぱり憧れのカップルだった。

その後、今朝雅也けさを運んでくれた男性が車で通りかかり、また雅也を乗せてくれた。「よく喧嘩するね。若いなあ」

メールで2人のことを、さつきと千夏と紀香のこかに連絡した。
みんなカバンを教室に置いていたため、学校に集まった。

美奈子の無傷な姿を見て、千夏は泣いて喜んだし、さつきは「逃げ足早いなだね」と関心していた。

美奈子は何度か追い詰められてはいたけど、小柄なため、すり抜けてどこにでも隠れられたらしい。

「危なく、ゴミ箱の中にまで入ろうとしたよ」

身長は私と変わらないのに細いからね。美奈子は。

紀香は良弘のことを聞いて心配していた。…やっぱり諦めてはいないようだ。

私の友人は一途な人が多いなあと思つた。

「…てか真耶って、見かけによらずスゴいね」
さつきが言った。

「怖くないの？」

紀香が聞いた。

「怖くないって言ったら嘘になるけど…」

「必死になっちゃうんだよねっ」

私が言おうとしたことに美奈子がかぶさった。

「うん…悪いことだって分かってるんだけどね…」

「空手とか習ってたの？」

千夏が聞いた。

「何にも習ってないよ。昔ピアノを習ってた」

「え〜！？意外〜！！」

みんな口をそろえて言った。

「んで。ピアノ壊したんだね。強く引きすぎて。」

「バカにしないでよ千夏！」

カバンをもって

階段を降りた時に

勇司君にあった。

久しぶりにドキッとした。

…でもちよつと会いたくなかった。
変なところを見られたから…。

私は少し避けて靴箱に向かおうとした。
その時だった。

「じゃあな」

久しぶりに聞いた声は変わらない優しい声で、懐かしさと共に嬉しさが半端じゃなかった。

「またね」

と返してすぐさま靴を履いて校舎を出た。

外は暑くて、暖かい夕陽が私を照らした。赤くて綺麗な光は暑苦しく感じなかった。

久しぶりにいい気持ちで広い校庭をみんなと歩いた。

「良弘なら大丈夫だよ。紀香^{のりか}」

さつきが言う。

「うん。分かってる。そうじゃなくてね!……私もかばって欲しかった……」

「なにそれ!あきれた!」

さつきが本当にあきれたように言った。

あまりの衝撃発言でみんな大爆笑した。

私達の笑い声が校庭中に響きわたる。

こんなに笑ったのは本当に久しぶりで気持ちよくて嬉しかった。

「本当に良かったね！美奈子っ」

「うんっ！ありがとうみんな！これで夏は楽しく過ごせそうっ！」

いつまでもニコニコな美奈子と私にさつきが一言こつ言った。

「応援団あるでしょ」

第9話。 ……夏

青くて広い空。白くて大きい雲。時期は夏。

今日は修業式が体育館で行われた。

人が密集していて暑苦しい時に、窓の方から時々流れてくる風は冷たく感じて気持ちよかった。

校長はいつもの夏の挨拶やこれまでの生徒達の様子などを話したあとに、雅也が被害をうけた暴力事件について少しだけ語った。

「本校のある生徒が……三年生は大切な時期であって……二度とこのようなことがないように……」

中学生のころと変わらない雰囲気ですは終了し、各生徒はざわざわしながら教室へと向かった。

通知表を受け取り

ホームルーム「帰りの会」が終わると、夏休みだ！と喜ぶ人もいれば、私のようにそうでもない人がいた。

だって私は…応援団の練習が…

結局、昨日の帰りに「応援団の参加者名簿」を提出するのを忘れていた千夏とさつきは、学校へ戻って私と美奈子しか丸がついていない紙を応援担当の先生に出したみたい。

「さつきの修業式に連絡があつたように、応援団員希望者は13時に体育館へ集合しろよ！」
担任そういつて教室から出た。

「そんなに落ち込むことないって〜！」
机にグツタリしている私に近づきながら千夏が言った。
「そんなに嫌なら丸しなければ良かったのに」
隣の席にいる雅也が笑いながら言った。

「だって！その時のノリってどうか…ねえ！美奈子」
「私は雅也のいない暇な夏休みはつまらないって思ったから…」
雅也の机に両腕を置いて美奈子が雅也を下から見つめる。

「え！俺のせい？」
「雅也も応援団しようよ！ね！真耶」

「そうしなよ！雅也。美奈子、「雅也がいないと死ぬ病」にかかってるんだから！」

「そうそう」

さつきもつなずいた。

「応援団の入団者が、学年全員で10人って決まってるから、それ以下だったら雅也は入れる。それ以上だったら真耶と美奈子は抜かれる可能性があるよ」

さすが、しっかりした体育委員は先生の話を聞いている。でも千夏は「そうなんだ」と関心する始末。

そんなこんなしているうちに時間は経ち、私と美奈子は体育館へと再び向かった。

集まりは10分程度で終了した。

「戻ってくんの早っ！」

千夏が焼きそばパンをかじりながら言った。

「どうだった？…ん、その様子だと2人とも辞められなかったんだね」

さつきは鋭い。10人募集をしたところ希望者はピッタリだったのだ。

私と美奈子は落ち込んだけど、私はちょっとやる気を出していた。だって…

「勇司君がいたんだよね。真耶」
美奈子がみんなに明かした。

これからほぼ毎日ある応援の練習…憂鬱ゆううつだったのが今じゃ幸せの日々に感じる。

「あ！そういえば紀香のしか！良弘君も応援団にいたよ。団長だよ」
千夏のパンを欲しがっている紀香に報告してみると、

「え！戻ってたんだ！」
と、喜んだ様子で跳んできた。

「ほら。大丈夫って言ったでしょ私」
さつきが紀香に言った。紀香はうなずく。

「あゝあ…。私も応援団に入れば良かった…」
「今さらだよ」

千夏が軽くあしらった。

「そっだよね…。じゃあ私！応援団の応援する！」
「俺も！」

メロンパンをかじりながら、紀香の発言に同じる雅也。

みんな笑いながら
「なにそれ〜！」

といつももの反応で場が盛り上がった。

ラブラブな雅也と美奈子。

良弘君のことが好きな紀香。

勇司君と同じクラスにいる彼と喧嘩をした千夏。

勇司君のことが気になる私。あ。もう好きって認めちゃおうかな。

さつきはどうなのかな…？

勇司君のことが好きなのかな。

もしかして私に気を使ってるのかな。

それがどうなのかは、ずっと先の未来で知ることになる。

美奈子と雅也は久しぶりに2人でデートをするらしく、一緒に学校を出て行った。

残った私と、紀香、さつき、そしてクリームパンを食べている千夏はもう少しだけ教室に残ることにした。

「やけ食いすると太るよ」

さつきが注意した。

私も心配した。

それでも千夏は

「いーの！」

と、かまわず食べ続ける。

それを見ていた私は、図書の本を借りる予定だったことを思い出した。

「楽譜があるでしょ？あれを借りたいんだけど、開いてるかな？」

「え！？今も習ってるの？」

千夏が聞いた。

「趣味だよ趣味！」

そう。趣味。私は家の片隅にあるキーボードで色んなアーティストの曲を弾くのが好きだった。

下手だけど。

私はすぐに一階へと向かい、購買部のすぐ左隣にある図書室へと急いだ。

「良かった…！まだ開いてた！」

欲しかった楽譜はしっかりとあった。私は安心して楽譜を手にとった。

「音楽が好きなの？」

ふと、振り返るとそこには…

「勇司君…！」

私はなぜか慌てて楽譜を隠した。

「あはは！隠すことないよ俺も音楽好きだし」

…そうなんだあ！

「音楽っていいですね！」

私が言うと、また勇司君は笑った。

「なんで敬語？」

そう言ってまた笑い出す。

その笑顔は本当に輝いていて、ますます愛おしく感じる自分がいた。

「勇司君はどんな楽器が…」

「あ。俺のことは呼び捨てで良いよ。俺も真耶ってさりげなく呼び捨てしたし」

「…え？」

私はいつのことか分からなかった。

「あれ？分からなかった？ほら！放課後ぶつかってさあ！」

…あ！私が勇司君の万年筆を落とした時だ！
でも名前で言われたことは気づかなかった。

「あの時はごめんね…」

大事な物を落とすしちゃったから…。

そう謝ったらまた勇司君は笑った。

「まだ言ってる〜！謝ることないって言っただろ？」

よく笑うその人は本当に思いやりがあって、でも見た目はチャライ感じもするけど、温かみのある優しい人だった。

「も〜！笑いすぎだよ！！」

私と勇司君は一緒に笑った。

そしたら

図書の先生が「静かに！」って注意された。

私と勇司君は一緒に怒られた。

けど顔を見合わせてお互い微笑んだ。

この時は本当に幸せで、夢のようで、どこかの恋愛漫画の世界にいるようだった。

「応援団、優勝目指して頑張ろうな！」

勇司君は私の頭に、もっていた「推理小説」を軽くのっけて言った。そしてそのままカウンターに本をもって行って、図書室を出ていった。

私にはんまりしてしまった。

教室に戻ると早速さつきが、何かあったでしょ！と察した。

拒んだ私に千夏が

「ほれ！チヨコデニ！」

とカバンから出した。

「あんた買いすぎだよ」

さつきはツツコミを入れて、また私の方を向いた。

「真耶、時停とあったんでしょ！」

時停ときどめっていうのは勇司君の名字。

ズバリとあたった。

「凶星だな〜っ」

千夏もニヤリと言った。

私は白状し、図書室でのことを話した。

みんなニマニマしながら聞いていた。さつきも。

話終わるといつものテンションでみんなが冷やかす。

「それにしても変わったね勇司！女子に優しいんだ〜」

千夏が関心した。

「不良だったよね中学生の時。ありがとうなんて言われた試しがない」

さつきも言った。

「今もチャラいけどね」

紀香が千夏の残したクリームパンをつまみながらいった。

「ふうん…」

やっぱり性格も不良だったんだ…。でも今は違ってもん。

「そろそろ帰ろう！」

紀香がカバンをもって言った。

みんな同意して教室を出る支度をした。

私は楽譜を大事にカバンに入れた。

プリクラを撮りに行こう！と千夏が提案したけど、みんな反対した。

「早く家に帰ってゴロゴロしたいもん」

紀香が言った。

私もうなずいた。

校舎を出るまではみんな千夏の話に賛成したるつけど、外は灼熱の大地獄と化していた。

「教室は扇風機があるからねえ……」
さつきがつぶやいた。

私以外はみんな反対方向だったため校庭を出たら、すぐに分かれた。

「応援団頑張れ〜！」
千夏の言葉を最後に手を振り、私は進行方向を向き直した。

キラキラに光る太陽は本当に眩しくて、雲はそれを隠そうとはして
くれない。

気づいたらセミがもの凄い鳴き声をあげている。

…ん？羽をこする音だっけ？

家の庭に入ると日焼け対策姿で「おかえり」と母が言う。いつもど
おり花の手入れをしていた。

「ただいま〜今日も疲れたよ」

「冷蔵庫にアイスあるから食べなさい」

玄関を開けると少しだけ気温が下がっていた。

エアコンはあるけど母の貼り紙により禁止されている。

私も父も最初は反対したけどエコのためだからと言われて納得した。

私の部屋は二階にあつてキーボードもそこにあつた。私は借りた楽譜を立てかけてちよつと思ひ出し笑い…。
「自分キモイっ！」

セミの合唱。

キラキラの太陽。

鳴らない風鈴。

回る扇風機。

冷え切つたソーダアイス。

夏休みは今始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4339x/>

ゆきだるま

2011年10月30日13時06分発行